

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

( 3 年計画の 1 年目)

## 1. 研究課題

フーコー研究—人文科学の再批判と新展開

Foucauldian Studies : Reassessment and New Developments in the Human Sciences

## 2. 研究代表者氏名

小泉義之

KOIZUMI Yoshiyuki

## 3. 研究期間

2017年 04 月 - 2020 年 03 月 (1 年度目)

## 4. 研究目的

今日おおよそコーパスが確定されつつあるミシェル・フーコー(1926-84)の膨大な仕事の中核には、西洋近代に淵源する「人文科学」の歴史的批判の試みが置かれている。実証研究の再読と哲学的考察を交差させ、狭義の認識論に還元されない政治的・実践的な射程をもつフーコーの仕事は、現在もなお世界の人文・社会系諸学において避けて通れない参照項であり、その重要性はますます高まりつつある。だが、フーコーを方法論として応用しようとする試みや、それぞれの分野でフーコーを継承もしくは批判しようとする取組みのなかでは、フーコー自身の仕事の変遷や内的一貫性が顧慮されることは必ずしも多くない。また、フーコー自身の仕事を対象とする研究はもっぱら哲学史や思想史の領域で行われ、フーコー自身が再検討の対象とした「人文科学」諸分野の動態にまで遡ってフーコーの仕事の意義を究明する研究は稀である。本共同研究は、「人文科学」諸分野の第一線の研究者を結集し、フーコーの仕事全体の意義を現在の「人文科学」研究者の観点から多角的に明らかにするとともに、フーコーによる「人文科学」批判の歴史的価値と現時点でのその可能性を見きわめることをめざす。

At the center of Michel Foucault's colossal work, whose corpus is nowadays almost completed, one finds his attempts at a historical criticism of the "human sciences" originating in Western modernity. Foucault's work, which lies at the intersection of reviews of empirical research and philosophical speculation, has a wide political and practical range, which is not reducible to simple epistemology; it constitutes an indispensable reference in human and social sciences, the value of which is more and more important in today's world. Yet, among the attempts to apply Foucauldian

methodology in one's own field by either adopting or criticizing Foucault's position, those that analyze in depth the changes as well as the inherent consistency of his work are not numerous. Moreover, while Foucault's work is mainly examined from within the framework of the history of philosophy or the history of ideas, attempts at determining the significance of Foucault's own reexamination of the historical and contemporary movements in the different fields of "human sciences" remain rare. The objective of this research seminar is to enable leading researchers in various fields of the "human sciences" to work together in order to bring out the significance of Foucault's work in its totality, and to determine the historical value and actual potential of Foucault's criticism of the "human sciences".

#### 5. 本年度の研究実施状況

本共同研究の中核は、班員がそれぞれの研究報告を行う研究会(例会)である。初年度である本年度は、ここまで、全4回の例会(各回2日連続、したがって8日)および1回の特別例会を開催した。例会の組織に当たっては、本研究の成果が単なる個人研究の集積になることを避けるため、各班員は班長と意見交換を行いながら自身の研究テーマを設定し、それぞれの個別研究が互いに有機的に関連し合うようなプログラムの構築に努めている。また、人文・社会系諸学を対象にしたミシェル・フーコーの仕事を見直す上で、フーコーが分析した諸言説、およびその諸言説をとりまく歴史的・同時代的言説の総体を原典回帰によって読解し直しつつ、さらにフーコー自身の分析を追認もしくは反駁する後発研究の検証を重ねている。各例会のプログラムについては、下記「本年度の研究実施内容」欄を参照のこと。

#### 7. 本年度の研究実施内容

2017-05-13 第1回例会(1日目) *Histoire de la sexualité, 1 : La volonté de savoir* (1976)の現行訳について 発表者 小泉義之 立命館大学

クロスオーバー バルト/フーコー 発表者 立木康介

フランスの中絶解放運動とフーコー 発表者 相澤伸依

2017-05-14 第1回例会(2日目) フーコーにおける精神分析と狂気:『狂気の歴史』から『精神医学的権力』まで 発表者 上尾真道 滋賀大学・非常勤

博士論文報告『主体化の哲学のために—ミシェル・フーコー研究』 発表者 藤田公二郎 大阪大学

2017-07-15 第2回例会(1日目) フーコーと法(*Loi, Droit*) 発表者 西迫大祐 明治大学

フーコーと文学 発表者 森本淳生

2017-07-16 第2回例会(2日目) 生権力を包含する現代メンタルヘルス・サイエンスに従属する規律権力としての精神医学 発表者 ニコラ・タジャン 国立精神神経医療研究センター  
フーコーと「真理」の言語化 発表者 武田宙也 大学院人間・環境学研究科

2017-09-30 第3回例会(1日目) ポリスと統治:福祉国家以後の(その1) 発表者 前川真行 大阪府立大学

18世紀科学史研究におけるミシェル・フーコーの位置付け:数学の社会史を中心に 発表者 隠岐さや香 名古屋大学

2017-10-01 第3回例会(2日目) Discontinuité et critique de la notion de « précurseur » en histoire des savoirs : réflexions sur un défi historiographique de Georges Canguilhem et Michel Foucault 発表者 Emmanuel Delille Centre Marc Bloch

モラル・トリートメントとは何か:『狂気の歴史』から考える 発表者 北垣徹 西南学院大学

2018-01-26 特別例会 Michel Foucault face à la complexité des univers normatifs 発表者 Otto PFERSMANN (招へい研究員、Écoles des Hautes Études en Sciences Sociales)

2018-01-27 第4回例会(1日目) ビッグ・サイエンスと環境のテクノロジー 発表者 瀬戸口明久

監獄情報グループにおける下層プロレタリア問題 発表者 櫻田和也 大阪市立大学

2018-01-28 第4回例会(2日目) 三つの『侍女たち』:フーコー、ラカン、森村 発表者 立木康介

フーコー『狂気の歴史』における『ラモーの甥』の位置 発表者 王寺賢太

2018-03-17 第5回例会(1日目) 「自己への配慮」を促す他者の他者性—フーコー『主体の解釈学』、『自己と他者の統治』、『真理の勇氣』における有限性の機能 発表者 千葉雅也 立命館大学

パレーシアと精神分析 発表者 春木奈美子 人文研・日本学術振興会

2018-03-18 第5回例会(2日目) フレンチ・セオリーとしてのフーコー(サイドとフーコー) 発表者 中井亜佐子 一橋大学

告白、パレーシアから「文学的」語りへ—隷属化されない主体化を求めて 発表者 上田和彦

関西学院大学

8. 共同研究会に関連した公表実績

【著書】小泉義之『あたらしい狂気の歴史 精神病理学の哲学』(青土社、2018年) 佐藤義之・廣瀬純『三つの革命 ドゥルーズ・ガタリの政治哲学』(講談社選書メチエ、2018年) 王寺賢太・市田良彦編『〈ポスト 68年〉と私たち 「現代思想と政治」の現在』(平凡社、2017年) TAJAN, Nicolas, Génération hikikomori (L'Harmattan, 2017) 上尾正道『ラカン 真理のパトス』(人文書院、2017年) 藤井俊之『啓蒙と神話 アドルノにおける人間性の形象』(航思社、2017年) 【論文】藤井俊之「進歩 —ヒアトゥスをめぐる問いかけ—」『思想』2017年4月号 長原豊「歴史という言説装置—死者が生者を捕らえる」『現代思想』2017年6月臨時増刊号 総特集＝マルクスの思想 前川真行「権力のエスノグラフィ、あるいは悪しき主体について」『現代思想』2017年11月号 特集＝エスノグラフィ

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	9 (3)	1 (1)	0	2 (2)	76 (25)	9 (9)	0	16 (16)
学内	1	1	0	2	0	5	0	10	0
国立大学	6	8 (2)	0	0	0	55 (10)	0	0	0
公立大学	2	3	0	0	0	18	0	0	0
私立大学	8	9 (1)	0	0	0	52	0	0	0
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	1	1	1	0	1	4	4	0	4
民間機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
外国機関	2	2	2	0	0	2	2	0	0
その他	2	2	0	0	0	6	0	0	0
計	23	35 (6)	4 (1)	2	3 (2)	218 (35)	15 (9)	10	20 (16)

※( )内には、女性数を記載

### 11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	19(13)
国際学術誌に掲載された論文数	2(0)

※( )内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
思想	1	進歩 ―ヒアトゥスをめぐる問いかけ―	藤井俊之
現代思想	1	歴史という言説装置―死者が生者を捕らえる	<u>長原豊</u>

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

### 13. 次年度の研究実施計画

平成 30 年度も、今年度同様、年間 5 回の例会(1 回につき 2 日、したがって計 10 日)の研究会を行う。現在申請中の外部資金が獲得できた場合には、さらに数回の研究会を追加し、また成果公開のためのシンポジウムやワークショップを企画する。来年度後半には、これまでの研究会における各班員の発表や、班長と各班員の意見交換を通じて見出される共通テーマないし共通の枠組みに沿って、研究班全体を 3 つないし 4 つのサブグループに区切り、研究班内部の構造化を試みる。それに伴い、各サブグループのイニシアティブによる研究会やワークショップなどの開催も視野に入れる。研究成果は、公開の準備のできたものから、順次、論文や口頭発表、シンポジウムなどのかたちで発表してゆく。

### 14. 次年度の経費

国内旅費	研究会参加費	開催回数 5 回 国内出張旅費(延べ 50 人)	支出予定額 1,400,000 円
合計			1,400,000 円

### 15. 研究成果公表計画および今後の展開等

上の「次年度の研究実施計画」欄にも記したとおり、本共同研究は、来年度後半、研究組織の構造化を試みる。それによって、いくつかのテーマに沿った専門性の高い研究を、それらテーマ間相互の緊密な連関を保ちつつ、組み立ててゆくことができる。それにもとづき、最終年度

である平成 31 年度には国際シンポジウムを開催し、海外の研究者も交えて、成果の一部を公表するとともに、同年度もしくは翌年度には本共同研究の集大成となる論集の刊行をめざしたい。これらの活動には外部資金の獲得が欠かせないため、その獲得に向けての努力は怠らない。